実践事例　二上第六単元

だいじなところに　気をつけて読もう

「サンゴの海の生きものたち」

新しい指導を考える会

■この教材の特徴

本教材「サンゴの海の生きものたち」（二上）は、子どもたちにとって、とても分かりやすい文章構造である。

まず、Ⅰ話題提示→Ⅱ話題の具体例①→Ⅲ話題の具体例②→Ⅳまとめという展開は、一年で学習した「どうぶつの赤ちゃん」（一下）と似ている。そして、具体例でそれぞれの生き物の体のしくみとほかの生き物とのかかわりについて順番に述べている部分は、「じどう車くらべ」（一上）を思い出させる。また、随所に載っている写真と、本文中の叙述を照らし合わせながら読み進めることは、書かれている言葉の意味を的確にとらえるための手助けとなる。これらの点から、本教材は、これまでの説明的な文章の学習の総まとめとして使うことができると考えた。

■子どもの実態

子どもたちは、これまでに四つの説明的な文章を学習してきた。どの文章も親しみやすい内容であり楽しく読んだが、内容への興味に偏らないように、「分かりやすい説明とはどんなものか」についても意識を向けた学習を展開し、日常生活にも生かすように心がけてきた。具体的には、

○時間的な順序を意識した書きぶり
○読み手に分かりやすく伝えるために、事象の後にその理由を付け加える書きぶり
○「問い→答え」「話題提示→説明」という書きぶり

などの、低学年で出会う説明的な文章特有の表現を、さまざまな場面で意識させた。

子どもたちが自分の国語力を実感できるのはどんなときだろうか。わたしは、子どもたち自身が「なぜそうなるのかな。」「どのように説明したらいいのかな。」といった課題に対して、これまでに学習した方法（既習知）と関連づけながら読みの見通しを立て、そのうえで読み進めたり自分の考えを表現したりすることができたときだと考える。

そこで、本実践では、次のような場面を設定した。

○既習知と関連づけながら読みの見通しを立てる。
○見通しに沿って読み進め、関連づけたことの確認やほかの子どもとの交流を通して自らの学びを実感する。

■単元の指導計画（総時数7時間）

第一次（第1～2時）教材文を読み、学習の見通しを立てる。

①写真を見て想像を膨らませ、教材文への興味をもつ。
②全文を読み、学習の見通しを立てる。

第二次（第3～4時）学習の見通しに沿って読み深める。

①イソギンチャクとクマノミのかかわり合いを読み取り、発表し合う。
②ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いについて読み取り、まとめる。

第三次（第5～7時）学習したことを生かし、説明文を書く。

①説明のしかたについて振り返る。
②友達に説明したいことを決め、調べ学習をして確かめる。
③説明のしかたを工夫して、知らせたいことを書く。

■指導のポイント

子どもたちが教材文に書かれている内容を理解する過程で、話題が文章の展開の中でどのように説明されているかを、既習知と関連づけながら読み解くとともに、その際に鍵を握る大切な言葉をきちんと理解していくことに焦点を当てる。

まだ関連づけができない子どもには、教材文と、話題提示がなくいきなり具体例から入る文章を比べさせ、どちらが興味をもって読むことができたかを実感させるところから始めた。すでに学習してきたことと関連づけが容易にできそうな子どもには、より分かりやすいまとめ方を選ぶことに意識を向けさせた。

また、内容への興味に偏りすぎないように、子どもが読むことに関して課題をもち、そこで書かれてある叙述からその答えを読み取るプロセスに興味をもたせるようにした。そのプロセスの中で「なるほど」と思ったり、見通しを立て、言葉をきちんと読むことが課題の解決につながるのだと気づくことが、国語を学ぶ子どもにとっての学びの実感と考えた。

■一人一人に確かな「読みの力」を身につけさせる実践事例

第一次　教材文を読み、学習の見通しを立てる。

①写真を見て想像を膨らませ、教材文への興味をもつ。

写真や挿絵を参考にすることで想像を膨らませた経験をもつ子どもたちは、それぞれの写真から感じたことをノートに書いた。

「クマノミは、毒を持っているイソギンチャクのそばにいて大丈夫なの？」

「大きい魚に食べられてしまうのでかわいそう。」

②全文を読み、学習の見通しを立てる。

説明的な文章での既習事項を振り返り、本教材にはどんなことが説明されているか読み進めるうえでの見通しを立てた。

「初めのところで、『どんな生きものたちが、どんなかかわり合いをしているのでしょうか。』と書いてあるから、その答えを説明してくれるはずだよ。」

「写真が二種類あるから、かかわり合いについては、二つ説明があるんだろうね。」

第二次　学習の見通しに沿って読み深める。

①イソギンチャクとクマノミのかかわり合いを読み取り、発表し合う。

子どもたちは、イソギンチャクとクマノミのかかわり合いを読み進め、各自が自由なスタイルでまとめることにした。授業の後半ではお互いの書き方を見せ合う場面を設定し、気づいたことを交流した。最初のうちは、何も書けずに困っていたり

教材文をそのまま書き写したりした子どもたちも、既習知と関連づけてまとめていた友達のノートを参考にすることで、これまでの学習を思い出して書き表すようになった。

②ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いについて読み取り、まとめる。

既習の読み方やまとめ方を参考にしながら自分自身で読み進めるとき、叙述を正確に読むことと、最初の感想と比べて「なるほど」と思えたことを明らかにすることを意識させた。

叙述を正確に読むことについては、前時の学習を生かすことで多くの子どもたちが迷うことなく読み進めることができるようになった。しかし、中には読むことやまとめることに熱中して「読む楽しさ」を見失ってしまう子どももいたため、初めて読んだときに浮かんだ感想や、疑問が解決する瞬間を大切にさせようと心がけた。そのためには、どの子どもがどの場面について感想や疑問をもっているのかを把握しておく必要がある。

【子どもたちの記述より】

A…教材文の内容に対する自分の考えを付け加えながら、かかわり合いを表現した。「ホンソメワケベラは？」という記述は、かかわり合いを意識している。

B…かかわり合いをまとめた。「どうぶつの赤ちゃん」の学習において、ライオンの赤ちゃんとしまうまの赤ちゃんの成長を比べる際、比較しやすくするために用いたことを覚えていた。

第三次　学習したことを生かし、説明文を書く。

①説明のしかたについて振り返る。

子どもたちは、教材文の説明のしかたを振り返り、だれかに何かを説明するためには、どんな書き方をしていけばよいかを確認した。そして、「お魚メモ」で文章を書いた経験を生かし文章を大きく三つに分け、はじめの部分で「問いかけ」による課題提示をし、なかの部分で「答え」の形で説明したいことを述べ、おわりの部分でそれらをまとめる文を書けば、分かりやすい説明になると考えた。



記述 A

自分にも書けそうだと感じた子どもたちは、興味があることを実際に書いてみることで、ほんとうに分かったのかを確かめることにした。

②友達に説明したいことを決め、調べ学習をして確かめる。

書き方に自信がもてた子どもたちは、書く中身にも自信をもつために、各自が興味がある生き物について調べ学習を行った。その際、学校司書の先生から関係する本を紹介してもらい、自分が必要とする情報を集めた。

③説明のしかたを工夫して、知らせたいことを書く。

子どもたちと相談し、第5時で確認した書き方で書いたものを、「二年三組生きものひみつ図かん」として一冊の本にすることにした。製本された本は数冊になり、教室に学級文庫として並べ、自由に読めるようにした。生き物の秘密に驚くと同時に、お互いの説明のしかたにも注目し、どのように書けば分かりやすいかを相互評価した。

■評価

○説明されていることを叙述に即して読み解くことができたか。（既習知を生かした読み、鍵を握る言葉「かかわり合い」に着目した読み）

○自分が調べたことを、相手を納得させる書きぶりで表現することができたか。（説明する順序）

子どもたちは既習知を生かしていたかが評価のポイントになる。見通しに沿って鍵を握る言葉を理解していたか、友達との交流により読みを深めていたかは、子どもたちの発言や記述で見取ることができた。

【子どもたちの記述より】

・「写真を見て不思議だと感じたことがあったけれど、文を読んでみたら分かった。」

・「○○さんのまとめ方がとても分かりやすい。わたしも前に学習したことを思い出した。」

【書けなかった子どもへの支援】

本文を写すことに夢中になってしまい、どこに何を書いたかが分からなくなり、結局、全文ほとんどを書いていた。そこで、その中で自分が知りたかった部分やなるほどと思った部分に線を引かせることで、鍵を握る言葉に迫らせた。

どちらか一方の生き物の様子しかとらえられなかったため、「かかわり合い」について記述ができなかった子どももいた。そこで、前述の記述Aを参考にさせ、もう一方の生き物がどのようにかかわっているのかに注目させた。

今回の実践を通じて、今学習していることが既習知と関連づけられることを知った子どもたちは、これまでの学習もこれからの学習も大切であることを感じたようだ。こうした試みが、一人一人の子どもたちの読みの力を高めるアプローチの一つになればと期待したい。